

ベトナムにおける王昭君関連文学作品

伊澤亮介*

1) 滋賀短期大学 ビジネスコミュニケーション学科

Vietnamese Literary Works about Wáng Zhāo Jūn

Ryosuke IZAWA

1) Department of Business Communication, Shiga Junior College

抄録:ベトナムの民間芸能である水上人形劇に、王昭君故事を基につくられたと思われる演目がある。しかし、その演目はタイトルのみ伝わり、内容についての詳細は分からない。日本においてと同じく、ベトナムにおいても王昭君および王昭君説話は広く普及し、詩賦を中心に文学作品も多くつくられた。「西遊記」関連の演目の研究によって、水上人形劇の台本とチュノム¹文学の間には密接な関連があるということが分かる。そのため、王昭君関連のチュノム詩を研究することにより、水上人形劇の演目の内容を推測することができる。漢文によって書かれたものも含めて、王昭君関連の作品を整理する。

キーワード:ベトナム文学, 字喃文学, 水上人形劇, 王昭君

1. はじめに

ナムディン省の水上人形劇村であるザック村に“Chiêu [昭] quân [君] công [貢] hồ [胡]”という演目が伝わっている (Hoàng Chương 2012)。他の多くの演目と同様にそのタイトルだけが伝わり、タイトルから王昭君関連の演目であろうということは分かるものの、内容やセリフなどについて残された資料は見当たらない。

一方、ベトナムにおける他の王昭君伝説を扱った文学作品を見渡してみると、『昭君貢胡書』、『昭君新傳』、『昭君貢胡傳』、『昭君新傳』等のザック村の水上人形劇の演目とよく似たタイトルを持った作品が散見される。

そこで、水上人形劇研究の一環として、その“Chiêu [昭] quân [君] công [貢] hồ [胡]”という演目の内容を推測するため、これまで集め得た王昭君関連の資料を整理しその内容について簡単に紹介、比較することが本稿の目的である。ベトナムにおける王昭君説話の展開を丁寧を追っていくには、中国、更には日本、朝鮮半島等の他の王昭君説話を受容した国における変遷も念頭に置いた上で、更なる詳細な資料の読み込みと慎重な比較検討が必要であると考えるが、それは後の課題としたい。

* rnskx639@yahoo.co.jp, r-izawa@sumire.ac.jp

¹ ベトナム語を表記するために漢字を基につくられた民族文字。

また、文中の表記について、ベトナム語は現在、「国語」(chữ Quốc Ngữ)とよばれるアルファベットを使った表記法で記されるが、日本語と同じように漢語由来の言葉が多く用いられている。例えば、「ベトナム」も漢字で表記すれば「越南」となり、この漢字をベトナム式に、日本でいうところの「音読み」をすると、Việt Nam つまり「ベトナム」となる。そこで、本稿では、もとの漢字を示したほうが日本人の読者にとって分かりやすいと判断したものについては、アルファベット表記したベトナム語の後に[]を用いてその漢字を示すことにした。例えば、Tây [西] Du [遊] Ký [記]といった具合である。

2. ベトナムと王昭君説話

『大越史記全書』興隆十四年(1306)夏六月条に、陳朝がチャンパー王に公主を嫁がせた際の記事として²、

「朝野文人多借漢皇以昭君嫁匈奴事，作国語詩詞，風刺之。」

【書下し】朝野文人，漢皇の昭君をもって匈奴に嫁がしむ事を借り，国語詩詞を作り，これを風刺す。

【試訳】朝野の文人は，漢の皇帝が王昭君を匈奴に嫁がせた故事に借りて，国語の詩詞を作り，このことを風刺した。

という一文がある。ここでいう「国語の詩詞」とはチュノムによる詩を指すと思われる³。

また，この記事の前後には，

「詮能国語賦詩，多用国語，実自此始。」(『大越史記全書』紹豊元年(1282)秋八月条)

【書下し】(韓)詮国語の賦詩をよくし，多く国語を用ふは，実にここより始まる。

【試訳】韓詮は国語の詩に巧みで，国語をよく用いるようになったのは，実にこの時から始まるのである。

「命天章学士阮士固講五経。士固東方朔之流，善諧諷，能作国語詩賦。我国作詩賦，多用国語，自此始。」(『大越史記全書』興隆十四年(1306)秋九月条)

【書下し】天章学士阮士固に命じ五経を講ぜしむ。士固東方朔の流にして，諧諷を善くし，よく国語

² この時の状況について、桃木(2001)には「南方のチャンパーに対しては、一二五二年に太宗が首都ヴィジャヤに遠征し、これ以後、布政、臨平(新平)などと呼ばれるクアンビン、クアンチ北部も徐々に陳朝の支配下に入ったらしい。元寇の時期には陳朝とチャンパーは協力関係にあったようで、一三〇一年には仁宗上皇がチャンパーを訪問し、そのときの約束に従って一三〇六年には、仁宗の娘の玄珍公主がチャンパー王ジャヤ・シンハヴァルマン(三世)に嫁した。この王はジャワ王の娘も妻にしていた。陳朝の文人たちは玄珍の「降嫁」を漢の王昭君の故事になぞらえて大反対したが、(娘を匈奴に送った漢帝にとってと同様に)仁宗・英宗父子にとってこれはとくに異常な行動ではなかったようだ。反対論を静めるため、陳朝はジャヤ・シンハヴァルマンに「烏里二州」を割譲させ、順州(現クアンビン省南部)・化州(現フエー帯)と改めた。」とある。

³ 桃木(2001)、古屋(2007)

の詩賦を作る。我が国の詩賦を作る、多く国語を用ふは、ここより始まる。

【試訳】天章学士阮士固に命じて五経を講ぜさせた。士固は東方朔の流れであり、諧謔に巧みで、よく国語の詩賦を作った。我が国で詩賦を作るのに、よく国語を用いるようになったのは、ここから始まったのである。

つまり、『大越史記全書』の記事に従うと、ベトナムでは、遅くとも14世紀初頭、そして、チュノムによる詩が作られるようになった当初から王昭君はその題材として朝野に広く受容されていたことが分かる。またその内容について考えると、上に見た興隆十四年(1306)夏六月条のように政治的な出来事を風刺する際も、王昭君故事は単に公主を異民族に嫁したという歴史的な事実ではなく、王昭君という女性の悲劇としてとらえられていることが見て取れる。桃木(2001)でも指摘されているように、漢の皇帝にとって、公主を匈奴に送ることは特別なことではなく、『史記』にも『漢書』にもその出来事について、批判的な言辭はない。王昭君故事を使って異民族に自国の公主を嫁すことを非難するとしたら、その後文学の題材として展開していく中で付け加えられた彼女自身の悲劇の部分以外には考えられない。

また、中国の王朝から見れば、陳朝も異民族の王朝ということになるが、王昭君の故事を以て、陳朝がチャンパーに公主を送ることを批判したということは、批判した者の頭の中では、漢朝=陳朝であり、匈奴=チャンパーと比定されていたということであろう。あるいは、もはや王昭君故事自体が異国(中国)から入ってきたものであるという意識はなく、知識人の、そして民間の教養となっていたといえるのかもしれない。ベトナムには、王昭君はベトナム出身であったという話や、王昭君を祀ったディンをもつ村があるほどである⁴。

3. 水上人形劇の演目とチュノム文学

タイビン省のグエン村に伝わる西遊記関係の演目に“Phá [破] động [洞] sơn [山] quân [君]”というタイトルをもつものがある(Tô Sanh, 1976)が、その内容や台本は伝わっていないので、詳しいことは分からない。しかし、そのタイトルから、「山君」(おそらく敵役の妖怪であろう)の住処を舞台とした物語であろうと考えられる。

一方、チュノムで書かれた六八体⁵の詩『西遊傳』にも「山君」なるキャラクターが登場し、その住処(洞)が物語の舞台となっているため、この演目の内容と『西遊傳』の内容とは関わりがあるのではないかと推測される(伊澤 2016)。

更に、水上人形劇の台本と考えられる『長山遺祿』の中にある「大聖本路」⁶のストーリーも『西遊

⁴ PHUNUTODAY “Vương Chiêu Quân mỹ nhân xin đẹp là người nước Việt?”
<http://www.phunutoday.vn/vuong-chieu-quan-my-nhan-xinh-dep-la-nguoi-nuoc-viet-d116784.html>

⁵ 六言と八言の句が韻を踏みながら繰り返される詩の形式。

⁶ ハノイ郊外、ハタイ地域のチャンソン(Chàng Sơn[長山])村にある水上人形劇団が保存していたチュノムで書

傳』とほぼ同様の筋をもっており、内容だけでなく、字句レベルでの共通性も見られる。

このように、水上人形劇の台本と、『西遊傳』などの民間チュノム物語 (Truyện Nôm bình dân : 口承の物語, 伝説, あるいは中国の通俗小説を、チュノムをつかって詩にした文学, Kiêu Thu Hoạch 2014) には密接な関連があると考えられる。そこで、王昭君故事を基にした演目であると思われる “Chiêu [昭] quân [君] công [眞] hồ [胡]” の内容を推測するのに、チュノム詩の内容から考えることができると考える。

4. 王昭君関連文学作品

4.1 漢文で書かれた作品

ベトナム国立図書館所蔵の『善學賦』⁷ (記号 R. 2051) には、様々な作者の様々な賦が収められているが、その中に「昭君出塞賦」がある。タイトルの下に「未詳出誰手 いまだ誰の手より出づるかは詳らにせず」と記されており、作者は不明である。



Nom foundation: <http://lib.nomfoundation.org/collection/1/volume/1178/page/10>

Nom foundation: <http://lib.nomfoundation.org/collection/1/volume/1178/page/11>

内容は、中国の王昭君の話とほとんど変わるところがない。才色兼備、画家のせいでも異郷に嫁ぐこ

かれた台本集。内容や形式からみて水上人形劇の台本あるいはかなり簡略化されたトゥオンの台本であると考えられる。(著者は2017年9月2日、人形劇団の元団長のグエン・ヴァン・ザウ Nguyễn Văn Dấu 氏の私邸で撮影させていただいた)。「大聖 (聖)」とはすなわち「斉天大聖」つまり孫悟空のことである。同じチャンソンのイベントン劇団 (チャンソン) に見られる Đại thánh [大聖] (Tô Sanh 1976) は、この『長山遺録』の「大聖本路」であると考えられる。

⁷ 抄本、年代不明。『善學賦』という資料のタイトルは、初めに収められている賦の題名から仮につけられたものである。

<http://lib.nomfoundation.org/collection/1/volume/1178/>

とになったこと、漢の後宮にいた時は元帝の寵愛に与れなかったこと、琵琶のモチーフ、国のために自らを犠牲にする悲劇のヒロインという描写、青塚と呼ばれる墓など、基本的な要素が読み込まれている。それらの要素を本文から拾っていくと、

才色兼備

風流第一，單誇金屋之嬌，佳麗三千，絶讓春風之態，

画家のせいで単于のもとに嫁ぐことになる

只畫工一筆，誤了紅顏，翻教繡終淹，愁凝翠黛，不謂彼戎，亦愛花容，單于請婿，

元帝の寵愛を受けなかったこと

昔焉禁院棲，身未承恩遇，今也他郷結髮，況是別離，贈行則，

琵琶のモチーフ、国のために嫁ぐ

孤春于清宵，幾曲琵琶訴餘音于月夜，情逐塞雲，心随海月，君命不可違，
而何怨乎落花流水之離，妾心不敢越，又何憚乎海？天涯之別，社稷有利，

青塚

半世之塵煙花未了，也是身為女將，出門之車馬遙喧，莫嫌一去紫墓，偏悲曉暮，剩有百年青塚，留向黃昏，

以上のように、漢文によって書かれた「昭君出塞賦」について、ベトナム独自の要素はほとんど見られず、中国におけるのと同じ王昭君のイメージに沿って書かれた詩であるということが分かる。

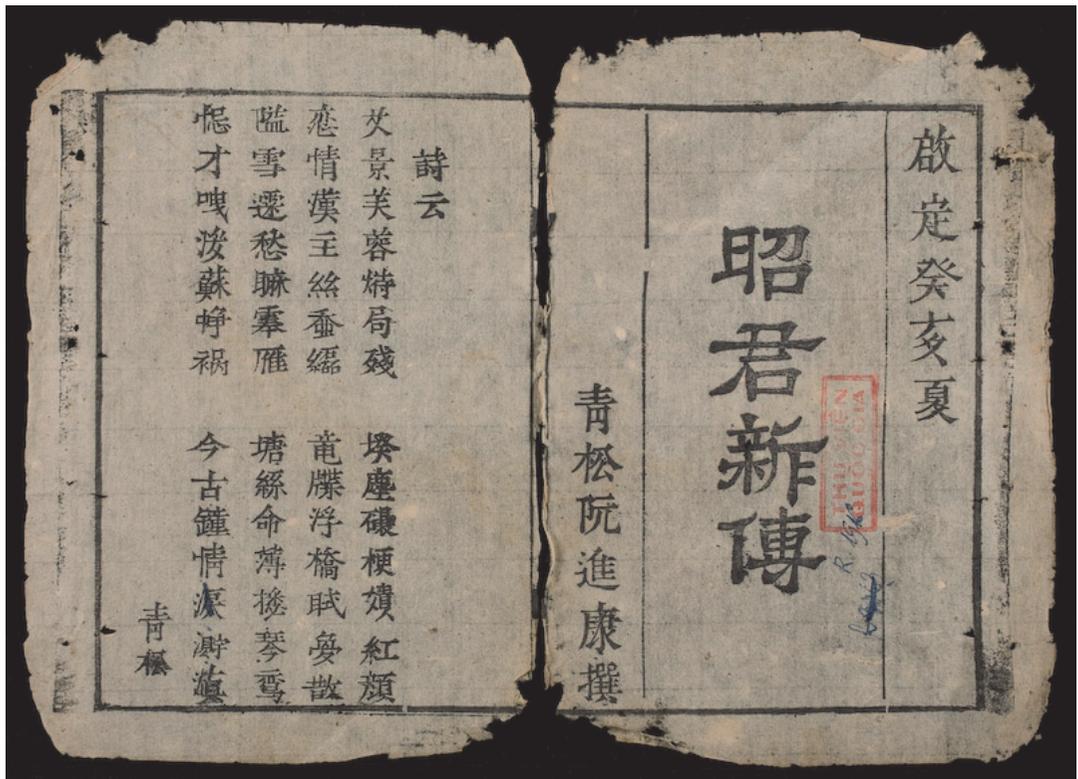
4.2 チュノム詩

15世紀末に編まれた『洪德國音詩集』中に、一連の王昭君関連のチュノム詩が収録されている。「昭君」、「昭君出塞」、「昭君自叙」の三首に加えて「元帝即位」から「敕詔追贈」までの三十四段からなる一連の詩、さらにそのあとに「附吊王嬙墓詩十絶首」、「總嘆王嬙終律」が付け加えられている。これらの詩は「附吊王嬙墓詩十絶首」を除き、ほとんどは七言八句から成る。

次に、ベトナム漢喃研究院のホームページによると⁸，“Chiêu [昭] quân [君] công [貢] hồ [胡] thư [書]”，“Chiêu [昭] quân [君] tân [新] truyền [傳]”，“Chiêu [昭] Quân [君] công [貢] hồ [胡] truyền [傳]”というチュノム詩がある。『昭君貢胡書』は、觀文堂によって1815年に中国で出版されており、全12葉であ

⁸ <http://www.hannom.org.vn/trichyeu.asp?param=846&Catid=248>

る。また、『昭君新傳』、『昭君貢胡傳』は、1922年、啓定壬戌の歳に阮進康の撰集によって出版されている。全52葉、40段から成り、その内容は、「越州の知事である王氏の娘である王昭君は才色兼備で元帝の後宮に入ったが、毛延寿に恨まれ、匈奴に送られることになった。異郷の地に到着すると昭君はうまく匈奴の王を動かして、毛延寿を除き、拘束されていた漢の將軍たちを解放した。その後、王に橋を建造させ祀りを行わせた後、貞節を守るためその橋から河へ身を投げた。後日彼女の妹が軍を率いて匈奴を倒し、姉の敵を討つとともに、漢の恨みを雪いだ。」というものである。『昭君新傳』は、国家図書館にも啓定癸亥（1923年）の版が所蔵されており（記号 R1916）、nom foundationにてウェブ上で閲覧できる⁹。

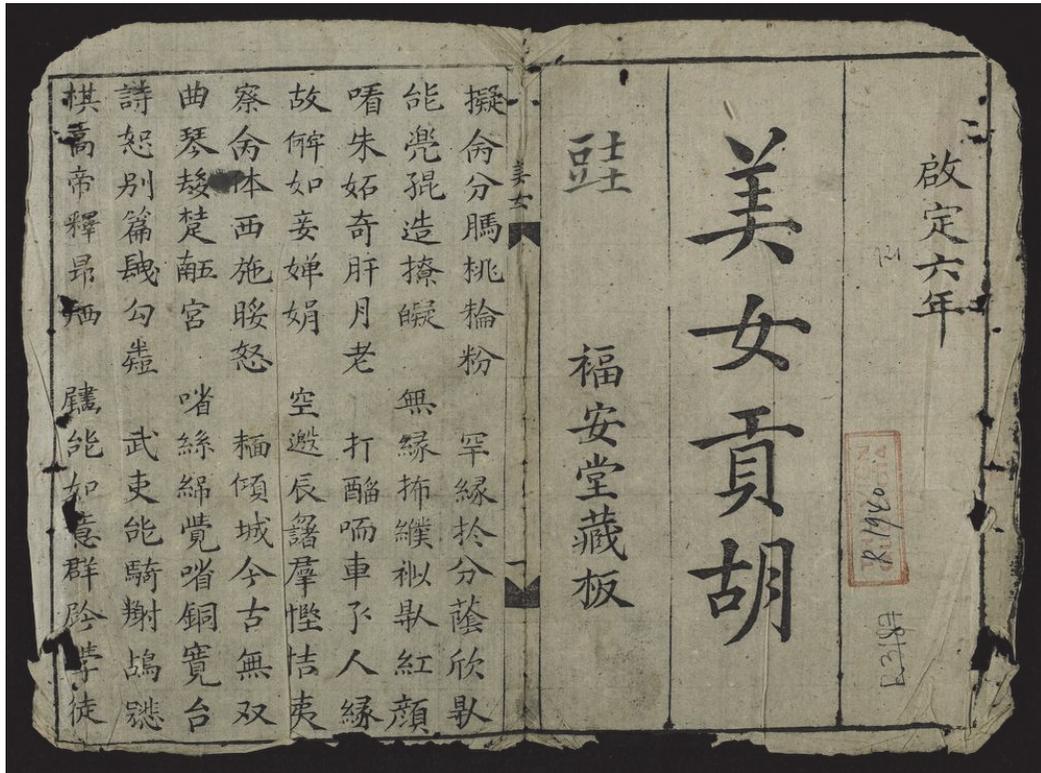


Nom foundation: <http://lib.nomfoundation.org/collection/1/volume/711/page/1>

最後に、“Mĩ [美] nũ [女] công [貢] hò [胡]”について述べる。国家図書館所蔵の版本（記号 R1940）には、啓定六年（1921年）とあり、全7葉と他の作品に比べて短く、内容は、異郷に送られた王昭君が、青春を後宮に閉じこもって送ってしまったことを後悔し、残してきた父母を想い、人生の自由と

⁹ <http://lib.nomfoundation.org/collection/1/volume/711/>

幸福を切望する、という話になっている。



Nom foundation: <http://lib.nomfoundation.org/collection/1/volume/33/page/1>

5. 結び

以上、ベトナムにおける王昭君説話について概観した上で、チュノム詩を中心に簡単にベトナムにおける王昭君関連の作品を整理、紹介した。テキストと本文についての詳細な分析とそれぞれのテキストの比較については今後の課題としたいが、漢文によって書かれた詩である「昭君出塞賦」並びに15世紀末の『洪德國音詩集』中に収録された一連のチュノム詩は元の中国における文学作品の内容からほとんど変化がないように思われるのに対し、その後19、20世紀の作品ではその内容が大きく変化しているようである。その変化がベトナム独自のものであるのか、また最終的な目的である、水上人形劇との関係という問題についても、今後研究進めていきたいと考えている。

文献

- 1) 伊澤亮介, 2016年, 「ベトナムにおける「西遊記」受容についての一考察」, 滋賀短期大学紀要第42号, 137-155.
- 2) 石井公成, 1998年, 「ベトナム語の字喃(chữ nôm)と梵語音写用の漢字」, 駒澤短期大学研究紀要 26, 41-48.
- 3) 陳荊和, 1981年, 『大越史記全書(上)』, 東洋学文献センター
- 4) 古屋昭弘, 2007年, 「漢字文化圏と「国語」」, 『言語』2007年1月号, 32-40.
- 5) Hoàng Chương, 2012, *Nghệ thuật múa rối nước Việt Nam* (『ベトナムの水上人形劇』), Nxb Văn hóa – thông tin
- 6) Kiều Thu Hoạch, Hoàng Hồng Cẩm, Nguyễn Thị Lâm, Trần Kim Anh, 2014, *Truyện Nôm Bình Dân* (『民間チュノム物語』) quyển 1, quyển 3, Nxb Khoa Học Xã Hội
- 7) 桃木至朗, 2001年, 「「ベトナム史」の確立」, 『岩波講座 東南アジア史 2 東南アジア古代国家の成立と展開』, 岩波書店
- 8) Tô Sanh, 1976, *Nghệ thuật múa rối nước Việt Nam* (『ベトナムの水上人形劇』), Nxb Văn Hóa